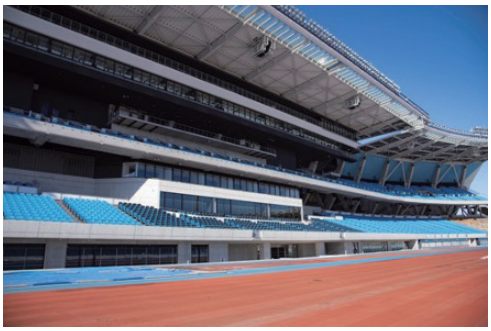
2019/01/27 事前キャンプを知ろう

川崎市等々力陸上競技場大公開！

川崎市では、東京2020オリンピック・パラリンピックにおける英国代表チームの事前キャンプ地施設として、川崎市等々力陸上競技場及び同補助競技場が使用されます。

そこで今回は、施設の1つである「等々力陸上競技場」について、川崎市建設緑政局 等々力緑地再編整備室 陸上競技場整備担当の竹内さん、中原区役所道路公園センター管理課の原さん、等々力陸上競技場グリーンキーパーの芦野さんに、施設設備や、特徴についてお伺いするとともに、施設内も案内して頂きました。



まずは知っておこう！等々力陸上競技場の豆知識

――川崎市等々力陸上競技場は、各種陸上競技大会やサッカー大会、川崎フロンターレのホーム戦など、様々な大会、試合が開催されていますが、まずは施設の特徴について教えてください。

原さん:

神奈川県内には日本陸上競技連盟公認の陸上競技場がいくつもありますが、等々力陸上競技場は現在、第3種公認で、今後、第1種公認を取得予定です。さらに、国際陸上競技連盟認証のクラス2を取得しています。ここまで取得しているのは神奈川県内では、日産スタジアムと等々力陸上競技場だけです。

ウサイン・ボルトや、オリバー・カーンなど世界的有名なアスリートも訪れています

竹内さん:

現在等々力陸上競技場では、英国代表チームの事前キャンプ施設で利用されることを見越して改修工事を行っています。トラックの色も現在のレンガ色から、青に変わります。近年大きな陸上大会が開催される競技場では青いトラックも増えてきていますね。前回リオオリンピック・パラリンピックの陸上トラックも青でした。

また、事前キャンプ受入競技となっているラグビーに関する整備として、ラグビーゴールも新設されることになっています。4年前のラグビーワールドカップから、競技人口やファンが増えています。等々力陸上競技場では13メートルのゴールを設置する予定です。

等々力陸上競技場ピッチの芝は日本でも1、２を争う短さ！

――サッカーなどで利用される等々力陸上競技場のピッチコンディションについてもお伺いしたいのですが、芝は年間を通してどのように管理されているのですか？

芦野さん:

ピッチは2種類の芝で形成されています。夏は青く冬は枯れる夏芝と、冬に青く春に向けて枯れていく冬芝を組み合わせて、1年中青い芝になるように整備しています。等々力陸上競技場ピッチ芝の特徴として、芝が短いことで知られていますね。事前キャンプに向けてラグビー、サッカー共に、選手に快適に練習して頂けるよう、芝の整備は十分に整えていきたいですね。

英国代表チームへのメッセージ

竹内さん:

英国代表チームアスリートの皆さんがどうやったら満足して頂けるか、視察の際にはその都度ご意見を伺っています。川崎市オリンピック・パラリンピック推進室と協力し快適な事前キャンプ地となるよう、体制を整えていきたいですね。

原さん:

等々力陸上競技場はパラアスリートの皆さんが快適に過ごせる動線も整っています。事前キャンプ施設としての使い方は通常と異なるケースもあるかと思いますので、必要に応じて運営の仕方を検討し、安全快適な環境で練習に集中していけるように管理していきたいです。

芦野さん:

英国代表チームの選手が希望する芝の高さ、また競技毎に相性が良い芝コンディンションは異なりますので、どの受入競技でも快適に練習できるよう、整備をしていきたいです。

――竹内さん、原さん、芦野さん、貴重なお話ありがとうございました。

2019/04/09 事前キャンプを知ろう

国際レベルのプールの秘密に迫る！横浜国際プールってどんなところ？

横浜市にある横浜国際プールは、東京2020オリンピック・パラリンピック英国代表チームの事前キャンプ施設です。国際公認プールとしても知られており、イアン・ソープや北島康介といったトップスイマーが参加したパンパシフィック水泳選手権大会をはじめ、数々の国際大会を開催してきました。

今回は、横浜国際プール指定管理者であるコナミスポーツ株式会社のマネージャー 阿部弘美さんに、施設の特長や英国代表チームの受け入れ体制についてお話を伺いました。

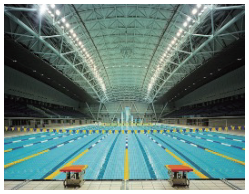
地域に愛される施設として、国際公認プールとして

阿部さん:

横浜国際プールは、市民の皆さまが利用されるスポーツ施設であり、国際公認プールとして国内外の大規模な大会を開催する総合競技場でもあります。私はマネージャーとして約100人のスタッフと共に、ふだんのお客さまの対応と安全面の管理、大規模な大会開催時の準備と運営全般を担当しています。

定期的に通ってくださる顔なじみの方も多く、ふだんから皆さまにお声がけしながら体調面の配慮やコミュニケーションを心がけるようにしています。

夏季はメインプール、冬季はスポーツフロア



阿部さん:

横浜国際プールのメインアリーナは、夏季5月～9月はメインプールとして、冬季11月～3月はスポーツフロアとして使用する、非常にめずらしい施設です。プールからフロアへ転換するには、時間をかけてゆっくりとプールの水を抜く必要があるため、約1か月の転換期間を設けています。

国際公認プールとしての大会開催を、見えない部分で支える専門スタッフの存在

―― 国際公認プールとして、どのような点に注意を払っていらっしゃいますか？

阿部さん:

“プールの水は生きもの”です。毎日毎時間、水のコンディションは変わります。国際公認プールとしては当然ですが、コンディション維持はもちろん水が抜けたり機械の不具合があったりしてはなりません。専門スタッフ20名が、プールの室温・水質・水温・水深などの管理を常時行っています。実は、プールの水温を上げるのは大変難しいことなので、夜間も水温チェックが欠かせません。また室温と水温の差が激しいほど寒暖差を感じやすいので、空調管理も大切な仕事のひとつです。スタッフ全員で、安全・安心な競技場の運営、維持に努めています。

英国代表チームを迎え入れるために さまざまな準備を行なっています

――英国代表チームを受け入れるにあたり、施設面では今後どんな準備を予定していますか?

阿部さん:

英国チームや一流アスリートならではの準備も必要となるので、英国チームとともに調整を進めています。2018年度には、競泳用のスタート台やコースロープも更新しました。今後、一般利用者の皆様にも、より充実した設備となる予定です。

今年1月には、横浜国際プール・都筑警察署・都筑区役所・都筑消防団・都筑消防署などの関係機関・約150名が参加し、横浜国際プールにおけるテロ災害を想定した訓練を行いました。万全な安全対策を施すために、関連機関で協力しています。

また、エントランスホールでは、英国についてのパネル展示と、東京2020オリンピック・パラリンピックのカウントダウン表示で、英国代表チームお迎えの雰囲気を盛り上げています。

「つづきジュニアタイムズ」でも、横浜国際プールで開催されたジャパンパラ水泳競技大会の様子を取材していただきました。

英国代表チームへのメッセージ

阿部さん:

英国代表チームの皆さんが、日本の環境に一日も早く馴染んで調整できるように、我々スタッフも精一杯お役に立ちたいと考えています。日本らしいきめ細やかなおもてなしの精神でお迎えしたいですね。英国代表チームのアテンドに備えて、今後英語のレッスンも考えています。

事前キャンプは、横浜や横浜国際プールの魅力を知ってもらうよい機会です。この得難い体験を、横浜市民の皆さまと一緒に共有していきたいと思います。

2019/09/19 英国代表チームを応援しよう

「横浜国際プール」で開催！ ジャパンパラ水泳競技大会から学ぶ、パラ水泳競技の魅力

東京2020大会・英国代表チームの事前キャンプが予定されている横浜国際プールにおいて、2019年9月21日（土）から23日（月・祝）まで『天皇陛下御即位記念2019ジャパンパラ水泳競技大会』が開催されます。昨年の大会には海外８カ国から41名のトップパラスイマーが参加しており、国際的な大会としての注目度もアップしています。そこで今回は、来年に迫った事前キャンプ、そしてパラリンピック本番を前に開催されるこの大会の見どころや、さらには東京2020大会への出場が予想されるイギリスの有力スイマーを紹介していきます。

ジャパンパラ水泳競技大会を楽しむための基礎知識

『ジャパンパラ水泳競技大会』は、パラリンピックや世界選手権をめざすトップレベルの選手のための大会として1991年から開催されている、国内最高峰のパラ水泳大会です。大会記録が国際公式記録として認定される、日本では数少ない国際公認大会でもあり、2018年大会にはイギリス、アメリカ、カナダ、メキシコ、コロンビア、スペイン、オーストラリア、ニュージーランドの８カ国から41名の選手が参加。国際大会としての色合いを濃くしています。

競技は基本的に国際水泳連盟のルールに則っており、使用するプールの規定や競技種目（自由形、背泳ぎ、平泳ぎ、バタフライ）も同じですが、障害の種別や程度ごとに「クラス分け」が行われ、男女別に同程度の競技能力を持った選手同士で順位が競われています。

障害種別とそのレベルは数字で区分けされ、1から10までが身体障害、11から13までが視覚障害、14が知的障害、15が聴覚障害となっており（その下にも比較的軽い障害のクラスが設置されている）、数字は障害の程度が重いクラスから軽いクラスへと増えていきます。また競技種目は自由形・背泳ぎ・バタフライを S、平泳ぎをSB、個人メドレーをSMと表記することから、例えば「SB1」は「身体障害の程度が最も重い選手による平泳ぎ」のクラスを示していることになります。

さらに、可能な限り一般の水泳競技規則に則った競技運営が行われるものの、障害によりやむを得ない場合には特別なルールも用意されています。例えば飛び込みスタートが難しい選手には、水中からのスタートが認められていたり、プールの壁を視認できない視覚障害の選手には、コーチがゴールやターンの直前に棒で選手の身体をタッチすることで壁が近づいていることを選手に伝えるようにしたりというものです。

これらのクラス分けやルールは基本的に東京2020パラリンピックの水泳競技でも共通するもの。本番前の基礎知識を得るうえでも、ジャパンパラ水泳競技大会を会場で体感するのは意義深いことといえます。

障害と向き合い勝ち得た、個性的な泳法を見る魅力

クラス分けやルールのみならず、ジャパンパラ水泳競技大会を現地で観戦することで感じ取れる、パラ水泳競技の魅力もあります。それは障害を抱えながらも、0コンマ1秒を争う選手たちの努力により勝ち得た工夫や技術を発見することです。

障害の種別や程度は選手それぞれで異なるため、最適な泳ぎ方も選手により変わります。例えば、片腕や片脚が欠損している選手や片半身がまひで動かない選手にとっては、左右の推進力や浮力がまったく違うため、まっすぐに泳ぐこと自体が困難なことです。それを一般的な泳法を参考に、自分の身体に合っていて、しかも一番速く泳げる方法をトライ＆エラーを重ねながら見つけていくのです。

ですから同じ競技でも、その泳法は非常に個性的。そこに至るまでの練習での苦労や、なぜその泳法にたどり着いたかなどに思いを巡らせることで、純粋なスポーツとしてのパラ水泳競技の魅力に深みが増すことでしょう。タイムの裏側にある、パラスイマーたちの“ドラマ”を感じ取ってください。

2019/09/19 英国代表チームを応援しよう

東京2020大会にも来日？ 英国の注目パラスイマー

水泳競技は、パラリンピックの中でも花形競技のひとつ。1960年に開催された第1回ローマ大会から正式競技として行われています。

そして英国チームは、アメリカ、中国、ウクライナなどと並ぶ強豪国であり、2016年のリオデジャネイロパラリンピックでは、計16個（男子6個／女子10個）の金メダルを獲得しています。

東京2020大会でも活躍が期待される英国パラ水泳チーム。今回のジャパンパラ水泳競技大会には、残念ながら出場しませんが、これまでに輝かしい実績をあげている注目選手を紹介しましょう。

ベサニー・ファース（Bethany Firth）

リオデジャネイロパラリンピックで金メダル3個（100m背泳ぎS14、200m自由形S14、200m個人メドレーSM14）、銀メダル1個（100m平泳ぎS B14）を獲得した、英国を代表する女性パラスイマー。中でも100m背泳ぎS14では世界新記録をマークし、圧倒的な強さを見せました。

ステファニー・ミルワード（Stephanie Millward）

1981年生まれのベテラン選手ながら、リオデジャネイロパラリンピックでは7種目に参加し、金メダル2個（100m背泳ぎS8、4×100mメドレーリレー）、銀メダル1個（200m個人メドレーSM8）、銅メダル2個（100m自由形S8、400m自由形S8）を獲得した、英国パラ水泳界のレジェンドともいえる女性スイマーです。

トニー・ショー（Toni Shaw）

2003年生まれの16歳という若さながら、2018年のヨーロッパ選手権400m自由形S9で優勝し、同種目における当時の世界ランキング1位を獲得した成長株の女性スイマー。昨年のジャパンパラ水泳競技大会で来日し、400m自由形S9では2位に7秒以上の差をつける圧倒的な強さで優勝しています。

リース・ダン（Reece Dunn）

今年に入り2つの世界新記録（100m自由形S14、200m自由形S14）をマークした、現在上り調子の24歳の男子スイマー。東京2020大会に向けて彼がどんな調整をしてくるのか、注目が集まっています。

これからレベルの高い代表争いを控えているので、この選手たちが東京2020大会に出場するかはもちろん未確定ですが、もし選ばれるとすれば金メダル争いに食い込んでくる実力者ばかりです。

ジャパンパラ水泳競技大会をきっかけにパラ水泳競技に興味を持ち、本番となる2020年東京での英国選手たちの活躍を応援してみてはいかがでしょうか。

2019/09/24 英国代表チームを応援しよう

【オリンピック競技編】東京2020オリンピック・パラリンピックに向けて知っておきたい！ 英国代表チームのここがスゴイ！

横浜市・川崎市・慶應義塾大学は、東京2020オリンピック・パラリンピックに出場する英国代表チームの事前キャンプをホストとして受け入れています。そこで、日本のトップアスリートやオリンピック競技指導者の方々に英国代表チームの活躍が期待される競技の見どころや、注目選手について語っていただきました。今回はオリンピック競技編です。

アテネ金メダリストが語る若き英国代表体操チームの勢い

「今の英国代表体操チーム全体の状況は、現在の日本代表ととてもよく似ています」そう話すのは、アテネ2004大会男子団体金メダリストで、リオデジャネイロ（以下リオ）2016大会では指導者としてチームを牽引して王者に導いた水鳥寿思日本体操協会男子強化本部長です。英国代表チームが練習を行う慶應義塾大学総合政策学部の専任講師（総合政策学部）でもあります。水鳥本部長へお話を伺いに出かけた日は、日本代表チームが東京・北区にある味の素ナショナルトレーニングセンターで熱い練習を繰り広げていました。

「英国代表チームと日本代表チームの共通点は、メンバーが良い意味で今まで頑張ってきたベテランから若手に切り替わりつつあって、勢いがあり、活気づいているということです」慶應義塾大学日吉キャンパスで行われた英国代表チームのトレーニングキャンプにも見学に行き、改めて確信したと話します。

「とは言え、注目しているのはやはりベテランのMax Whitlock MBE（マックス・ウィットロック）選手です。日本で言うとちょうど内村航平選手のような存在ですね」と教えていただきました。残念ながら、今回の慶應義塾大学でのトレーニングキャンプには参加していなかったとのことですが、チームをロンドン2012大会で団体3位、リオ2016大会では4位に牽引した立役者です。リオ大会では個人総合3位、あん馬と床の個人種目での金メダリストでもあります。

「若手のJames Hall（ジェームス・ホール）選手やNile Wilson（ナイル・ウィルソン）選手なども台頭してきています。英国が凄いのは、自国五輪開催だった2012年のロンドン大会より、4年後のリオ大会で全体のメダル獲得数を増やしアメリカに次いで2位の67個、体操競技全体のメダル数も7個と、日本の3個を大きく上回るところです。国営宝くじからの資金援助を受けるなど、選手の強化資金などに充てています」体操の世界のトップ5はアメリカ、中国、ロシア、イギリス、そして日本です。水鳥本部長は「どこも仕上がって来ていますが、日本も強いですよ、負けません」とのこと。

最後に、体操競技観戦の見どころについて伺いました。「体操は個人競技なのに団体戦もある、他に類を見ない競技です。その熱い闘いと共に体操自体の力強さ、美しさも満喫して欲しいですね。さらに、その時点での選手の持ち点によって、競技内容のパターンを変えたりする駆け引きがあるなど、見どころ満載です」

水鳥 寿思氏／アテネ五輪団体金メダリスト。2005年メルボルン世界選手権個人総合銀メダル、07年シュトゥットガルト世界選手権団体銀メダル、個人総合銅メダル、ゆか、鉄棒銅メダルなど。史上最年少の32歳で日本体操協会体操男子団監督・強化本部長、15年世界選手権では37年ぶりの、リオ五輪では五輪12年ぶりの金メダルにチームを導いた。慶應義塾大学総合政策学部専任講師。公益財団法人日本体操協会男子強化本部長、常務理事。公益財団法人日本オリンピック委員会選手強化本部常任委員など。

7人制ラグビーも強豪な英国代表チーム

川崎市が受け入れる競技の1つ、7人制ラグビー。7月のヨーロッパ予選で男女ともにイングランド代表チームが優勝し、英国代表チームが東京2020オリンピックへの出場を決めました。

「7人制ラグビー発祥の地の誇りもあり、絶対に負けられないという意気込みで乗り込んで来るでしょうね」と、教えてくれるのは、CAP41で元ラグビー日本代表、7人制ラグビー元日本代表監督でもあった専修大学の村田亙ラグビー部監督です。

世界最強はフィジーと言われていて、初めて7人制ラグビーが採用されたリオオリンピックでも優勝していますが、それに次いでの銀メダルが英国でした。強豪国は他に、銅メダルだった南アフリカ、ニュージーランドなどがいます。日本もリオでは予選でニュージーランドに勝利する等、大健闘して4位入賞を果たしています。

「7人制は、時にメンバーが15人制と被ることもあり、メンバーが固定出来ないことも、難しいところの1つでもあります。なので、現在も、英国代表チームの全容はまだ見えていません」とも。とは言え、英国代表チームは伝統的に大柄でフィジカルが強く、セットプレー、ラインアウトなどで上手さを見せるそうです。

その中でのキープレーヤーを伺いました。「Dan Norton）（ダン・ノートン）選手です。彼はトライゲッターですが、抜群に速い足を活かすのが特徴です。特に、短距離での速力は陸上の100m選手並みです。例えば、私が持っているデータで、あのウサイン・ボルト

2019/09/24 英国代表チームを応援しよう

選手とのタイム比較では、40mまではダンの方が速いです」村田監督のお手持ちの資料によると、ボルトVSダンは20m：ボルト2.89秒・ダン2.70秒、40m：ボルト4.64秒・ダン4.62秒。

15人制と同じ広さのグラウンドを7人で駆け巡るのですから、同じラグビーと言っても、内容は異なります。「ラグビーよりも個人の華麗なステップワーク、長くて正確なパス回しなどが重要になってきます。そして、そこに注目すると、またとても面白く競技が楽しめます。英国代表チームはキック、パスの精度も高く、ラインアウトも大変高い位置で取るので、そこも面白いですね」

とにかく前半7分、後半7分、グラウンド中を全力で駆けるスポーツ。しかも、同じチームが1日に何試合もゲームを行います。試合の面白さもですが、もう1つ香港セブンス大会を中心とした、観客たちの華やかなコスプレを見る楽しみもあると村田監督は指摘します。ピンクや黄色のアフロヘアーのかつらや、色とりどりの思い思いの衣装が観客席を埋め、観客もノリが良く、15人制とは、全く違う雰囲気を醸し出します。英国をイメージしたコスプレで、是非、応援に出かけてみてはいかがでしょうか。

村田 亙氏／専修大学体育会ラグビー部監督。元７人制ラグビー日本代表監督。東芝府中、ヤマハ発動機などでプレーヤーとして活躍。日本代表 CAP41。フランス、アビロン・バイヨンヌと日本人初のプロ契約。ポジションはスクラムハーフ。筑波大学大学院人間総合科学研究科修士課程修了スポーツ健康システムマネジメント専攻。体育学修士取得。ヤマハ発動機スポーツ振興財団審査員。磐田市スポーツアドバイザー。

東京2020大会出場最有力！
高橋侑子選手が見たトライアスロン王国・英国

最後は、横浜市で世界大会が開催されているトライアスロンです。東京2020大会への出場が期待されている、高橋侑子選手に英国のトライアスロン事情について伺いました。

高橋選手は小学生時代からトライアスロン大会に出場し始め、これまでに数多くの表彰を受けています。「東京・調布の桐朋女子中学校に進学、陸上部に所属する傍ら、中学3年時にジュニアの全国大会で優勝したのを機に本格的にトライアスロンに取り組み始めました。2017年からインターナショナルチームでの活動を始め、海外の拠点・コーチのもと、海外の選手たちと共同生活をしています。世界シリーズを中心に転戦をしながら東京2020大会を目指しています。」

2019年5月に横浜で行われた10周年記念の世界シリーズでは、日本人最高位の4位入賞を果たしています。英国は国際大会でほぼ毎年訪れているとのこと。

「英国ではトライアスロンの認知度が高く、大会はいつも盛り上がるので、レースをしていてとても楽しいです」

また、英国は選手層が厚く、強くて、気になる選手が沢山いますと教えていただきました。「どの選手もいつも笑顔でとてもフレンドリーですが、いったんレースがスタートすると、とてもアグレッシブで、強さの秘訣がどこにあるのか気になります」とも。

注目選手を挙げてもらいました。

・Jessica Leamonth（ジェシカ・リーマンス）スイムが速く、いつもレースを引っ張っている。Jessica選手の流れに乗れるかがいつも重要となっている。

・Georgia Taylor-Brown（ジョージア・テイラーブラウン）バイク、ランが強く、世界シリーズで何度も表彰台に乗っている。

・Non Stanford（ノン・スタンフォード）ランが強く、とてもタフな選手。

・Vicky Holland（ヴィッキー・ホーランド）昨年の世界シリーズチャンピオンでリオ五輪のメダリスト。

過酷と表現される競技ですが、乗り越えた先には達成感が強くあり、何よりも歳を重ねても続けていけるスポーツで、楽しみながら挑戦できるところがトライアスロンの醍醐味と言います。「この競技は3種目あり、特に種目の切り替えや展開が変わるところがトライアスロンならではの面白さなので、そこにも注目して見ていただきたいです」と、目を輝かせて教えてくれました。

高橋 侑子選手／トライアスロン選手。富士通所属。2019年第1期 JTUエリート強化指定。女子エリート強化指定 O-2。桐朋女子高等学校・法政大学出身。□主な戦績: 2019年 WTS横浜4位、18年 WTSバミューダ、SLマヨルカ、WC ニュープリスマ（ニュージーランド）など全て5位。17年アジア選手権パレンバン（インドネシア）優勝など。

高橋侑子サポーターズクラブ http://www.takahashiyuko.com/supporters-club.html

2019/12/20 英国代表チームを応援しよう

【パラリンピック競技編】東京2020パラリンピックに向けて知っておきたい！注目するパラリンピック競技と英国パラアスリートを紹介

東京2020大会まで1年を切りました。様々なメディアを通して各パラリンピック競技や、日本のパラアスリートを知る機会も増えています。そこで今回は、日本のトップパラアスリートや、パラスポーツ競技関係の方々に、英国代表チームの活躍が期待されるパラリンピック競技の楽しみ方や、注目選手について伺いました。

高桑選手が語る、パラスポーツの楽しみ方

まずは、パラスポーツ陸上競技短距離、走り幅跳びの選手である高桑早生選手（慶應義塾大学卒）に、パラ陸上の見どころについてお話を伺いました。高桑選手はロンドン2012大会、リオ2016大会に出場し、ロンドン2012大会では、初出場にして、T44クラスで100m7位、200m7位入賞を果たしました。

「日本において、パラリンピック競技の観戦を楽しむということがより浸透し始めたのは、リオ大会で初めてパラリンピックに中継が入った時からだと思います。大会後、帰国すると多くの方から「観たよ！」と声を掛けられるようになり、歴史的な変化を感じました」と、高桑選手は語ります。

そこで、高桑選手にパラスポーツ観戦を楽しむポイントを教えていただきました。①パラスポーツは新しいスポーツを観る感覚で楽しむ。②まずは自分が好きなスポーツから観戦してみる。③オリンピック競技にはない、パラリンピックならではの競技を楽しむ。④自分のスターを見つける。高桑選手自身もパラスポーツの大ファンであり、パラ水泳やパラテニス、車いすバスケットなど様々な競技観戦を楽しみ、応援されているそうです。

高桑選手が注目する英国代表パラ陸上選手

高桑選手が注目する英国代表パラ陸上選手についても伺いました。

ハンナ・コックロフト（Hannah Cockroft） T33/34（車いす）100m。ロンドン2012大会金メダリスト、2017世界パラ陸上競技選手権大会ロンドンでは出場種目全てにおいて金メダル獲得しています。

ジョニー・ピーコック（Jonnie Peacock）T44（下肢切断者）100m。ロンドン2012大会、リオ2016大会にて金メダルを獲得しています。

高桑早生選手が海外で見る、日常に根付くパラスポーツの光景とは　https://gogb2020.jp/columns/interview_takakuwasaki/

高桑早生（たかくわ・さき）／NTT東日本所属。1992年５月26日埼玉県生まれ。小学６年の冬に骨肉腫を発症。中学１年の６月に左足ヒザ下を切断。東京成徳大深谷高校陸上部、卒業後、慶應義塾大学総合政策学部入学、体育会競走部入部。数々の輝かしい戦績を持つ。

ロンドン2012大会: 100メートル、200メートルともに７位入賞　　リオ2016大会: 女子走り幅跳び 5位、女子200m7位、女子100m 8位

インチョン2014アジアパラ競技大会（韓国）：女子100m 3位　　2015 カタール IPC陸上競技世界選手権: 女子走り幅跳び 3位

2017 世界パラ陸上競技選手権大会 (英国)：女子走り幅跳び（T44）5位

パラ柔道の見どころは、格闘技性の高さ

続いて、この夏、英国代表選手が慶應義塾大学日吉キャンパスでトレーニングキャンプを行ったパラ柔道の見どころについて、日本視覚障害者柔道連盟事務局の松下邦彦総務部長にお話を伺いました。

「パラ柔道の特徴の一つは組み手争いがなく、常に組んだ状態で競技を行うことによる格闘技性の高さです。格闘技が好きな方たちにも大変興味深いスポーツだと思います。□英国チームの印象は、先月行われたIBSA柔道ヨーロッパ選手権の結果をみると、男子重量級が強いイメージがあります。直近の世界ランキングでみても、男子の重量級は上位にランキングされています。」

また東京2020大会への期待も伺いました。「柔道はオリンピック・パラリンピックの共通のキーワードとして“共生”を掲げており、バリアフリーが一層促進される機会となり得たら良いと考えます。」

パラ柔道は今年8月21日から23日の間、柔道の英国代表チーム（Team GBおよびParalympicsGB）が日吉キャンパスにてトレーニングキャンプを実施しました。当日の選手の様子など、ぜひ「慶應義塾大学WEBサイト」よりご覧ください。

柔道の英国代表チームが日吉キャンパスでトレーニングキャンプを実施　https://www.keio.ac.jp/ja/news/2019/9/5/27-62861/

注目するパラ柔道英国選手

上記トレーニングキャンプでも来日された、注目したい英国代表パラ柔道選手をご紹介します。

クリス・スケリー（Christopher Skelley）1993年生まれの26歳。カテゴリーは100kg以下。リオ2016大会では決勝にも進出し、東京2020大会への選出も期待されています。

取材を終えて／注目したいパラリンピック競技とその魅力、英国代表パラ選手についてご紹介しました。英国において、パラリンピック観戦はオリンピックと同様の熱気と観戦ムードに包まれています。ぜひ私たちも、2020年英国代表チーム事前キャンプに向けて、英国同様に、パラリンピックを盛り上げていきませんか。

2019/12/20 英国代表チームを応援しよう

高桑早生選手が海外で見る、日常に根付くパラスポーツの光景とは

東京2020パラリンピック競技大会まで残り1年を過ぎ、パラスポーツへの注目が一層集まっています。今回、日本代表として長年活躍するパラアスリート、高桑早生選手（陸上・慶應義塾大学卒）から、世界有数のパラスポーツ王国・英国などで感じた、パラスポーツを取り巻く環境や意識の違い、その変容の歴史、東京2020大会への期待について、お話を伺いました。

長年見てきたパラリンピックから感じる、環境変化

「パラリンピックは北京2008大会の頃から、大きく変わり始めています。そして、その発祥の地という自負がある英国は、ロンドン2012大会で大成功を収めました。日本でも、もっともっとパラスポーツを楽しんで欲しいです。」

こう話す高桑選手はロンドン2012大会、リオ2016大会に出場。初出場のロンドン2012大会では、T44クラスで100m7位、200m7位入賞を果たしました。「ビギナーズラックです」と謙遜されていますが、続くリオ2016大会でも、100m8位、200m7位と同水準を維持しつつ、走り幅跳びでも5位と好成績を記録。

「私は、北京2008大会の頃から、パラ陸上に取り組み始めました。その頃は、ちょうどパラスポーツの過渡期と言えるタイミングで、取り巻く状況が徐々に変わってきていました。それ以前はパラスポーツはリハビリの一環と考えられていた時代もあり、遠征も自費で参加するなど、先輩方は本当に苦労されたそうです。2014年韓国のインチョンアジア大会からは、それまでパラアスリートが使えなかったマルチサポートハウスが使えるようになりました。マルチサポートハウスとは、選手村外に設置された施設で、食事やコンディション作りなど選手団へのさまざまなサポートを行なうためのものです。また、少しずつですが試合もテレビ中継されるようになり、報道も増え始めました。変容していく過程を、当事者として実感してきました。今や、私たちも『トップアスリート』と呼んでもらえるようになり、パラアスリート採用を行う企業もでてきています」

英国パラスポーツを支える、“人のバリアフリー”

「英国はすごいです。パラスポーツ発祥の地の自覚からか、本当にパラスポーツが盛んですし、ボランティアの皆さんなど周りの盛り上げも素晴らしいです。英国にいると、自分たちがパラアスリートであることを誇りに思えます」興奮気味にこう話す高桑さん。ただ、実際に見たロンドンの街は、石畳が多く、決してパラアスリートにとって受け入れ体制が万全な訳ではなかったそうです。主要な移動手段は地下鉄、複雑な構造の建物でブラインド（視覚障害）の選手が苦労したケースも。それでも、英国のみならず欧米では、街を歩いている人々が、誰かしら声をかけてくれて、助けてくれる雰囲気が漂っているとのことです。

「今年出場したワールドパラアスレティクス グランプリ パリ大会の時に驚いたのは、赤ちゃん連れの若いお母さんが、私に対して『あなた、ちょっとこれ持っていてくださる？』って、普通に会話するような感覚で、サポートを求めてくるのです。不自由がある側から、当たり前のように、手を貸して欲しい、と。日本でも最近は手を貸せる側からの声掛けは増えてきましたが、“人のバリアフリー”とも言えるようなこのような空気感はまだまだないですよね。」

また、2017年にロンドンで開催された、世界パラ陸上競技選手権大会では、さまざまな工夫が施されました。

「通常なら、健常者の大会の後にパラの大会が開催されますが、この大会では、初めてパラの大会が先に開催され、その後、健常者の大会という順番で行われました。これは、実に画期的なことでした。パラの大会で大いに沸き返って、そのままの勢いでバトンタッチする。もちろん大成功でした」

東京2020大会を通じて日本を知ってもらいたい

高桑選手は英国とも縁があり、母校である慶應義塾大学日吉キャンパスが英国代表チーム事前キャンプ施設の一つとなったことも、喜んでいます。また自身も、現在慶應義塾大学日吉キャンパスのグラウンドや施設を使って、毎日練習にはげんでいます。

高桑選手には、英国に限らず海外出身のアスリートの友人が大勢いるそうです。彼らが東京2020大会に期待することについて、高桑選手はこう語りました。

「彼らにとって日本はまだまだ未知の国で、東京2020大会のパラアスリートの受け入れ体制がどうなっているかということよりも、もっと日本そのものについて知りたいと考えているようです。私で教えられることであれば、何でもお手伝いしていきたいと考えています。今年開催するラグビーワールドカップでも海外からアスリートが多く訪れるので、良いお手本になるかもしれませんね」

いかがでしたでしょうか。高桑選手が英国で見てきた、日常に根付くパラスポーツ、そしてパラアスリートが自信と誇りを胸に競技に臨める “人のバリアフリー”。日本でも、メディアによる番組や報道、各種イベントを通じて、パラスポーツが盛り上がりを見せています。東京2020大会に向けて、私たち１人１人の意識や行動を見直してみることが、国内外のパラアスリートを温かく迎えることにつながり、彼らにとっての心の支えとなるのかもしれません。

2019/09/02 英国代表チームを応援しよう

英国代表チーム(Team GB)器械体操選手にインタビュー

7月初旬、英国代表チーム(Team GB)器械体操チームが慶應義塾大学日吉キャンパスの蝮谷体育館でトレーニングキャンプを行いました。いよいよ1年後となる東京2020オリンピックでは、日吉キャンパスが横浜市・川崎市とともに英国代表チームの事前キャンプをホストとして受け入れることが決まっていますが、今回はそのテストキャンプの位置づけです。

7月10日には、英国メディアを迎えてオープン・メディア・デーが開催されました。ブリン・ビーヴァン選手、コートニー・タロック選手、ジェームズ・ホール選手に、慶應義塾大学でのトレーニングキャンプについての感想や、来年に向けての抱負を伺いました。

オリンピック・パラリンピックと慶應義塾 https://www.keio.ac.jp/ja/olympics/

ブリン・ビーヴァン選手

「スポーツでは、こんな機会は一度しか得られません。世界レベルの活躍ができるのは若い頃だけです。私は2歳から体操を始めて今22歳なので、もう20年になりますが、とりわけ器械体操競技の選手としての寿命はあまり長くはなく、多くが20代後半から30代の初めまでといったところです。ですから、この短い間にできる限りのことをしなければならないわけです。これ以上ないくらい努力し、最もハードなトレーニングを重ね、試合においても、自分のキャリアにおいても、確実に、最大限に自分自身を引き出せるようにね」

コートニー・タロック選手

「蝮谷体育館に初めて来た日、慶應の器械体操部員が一列に並んで待っていました。ひとりひとりが握手をして温かく迎えてくれ、私たちが何でも使えるように準備を整えてくれていました。私たちは今、ここでの時間を楽しんでいます。体育館まで歩いてくる途中、このキャンパスには本当にたくさんの人がいて、なにかしらしているのが見えて、とてもいいなと思いました。本当に素敵なキャンパスで、私たちも慶應に来られて嬉しく思います」

ジェームズ・ホール選手

「ちょっと歩いているだけで、本当にたくさんの人たちがいろんなスポーツをやっているのが見えますよね。英国とは全く違う光景なんです。もちろん英国にもそういう大学が全くないわけではありませんが、あったとしても、ごくわずかです。こんなにたくさんの人たちがスポーツに親しんでいるのは、いいものだなと思います。こういう環境にいると、なんだか一層ワクワクしますね」

TOKYO2020公式 Twitter
https://twitter.com/Tokyo2020/status/1152430090812186627

2020/01/10 英国代表チームを応援しよう

英国選手団長ペニー・ブリスコーさん、パフォーマンス責任者トム・ポールソン博士が、東京2020大会に向けた抱負と期待を語りました！

東京2020大会の英国パラリンピック代表チーム事前キャンプを受け入れる川崎市は2019年12月5日（木）、英国パラリンピック委員会のスポーツ局長で英国選手団長のペニー・ブリスコーさんと、パフォーマンス責任者のトム・ポールソン博士による講演会「ParalympicsGB: Towards TOKYO（英国パラリンピック代表チーム 東京大会に向けて）」を開催しました。

冒頭、川崎市民文化局オリンピック・パラリンピック推進室の原隆室長が挨拶に立ち「英国は、これまでパラリンピック夏季大会で1,790個のメダルを獲得している強豪国。今回も選手団長のペニー・ブリスコーさんが、強い代表チームを率いて東京2020大会に臨んでくれるはずです。代表チームのサポートをするため、川崎市が行ったボランティア募集には、300名の定員に対して5倍以上の応募がありました。これは英国チームを応援しようという、多くの市民の熱意の表れだと感じています。川崎市としても『GO GB 2020』を合言葉に、英国チームの事前キャンプ、そして東京2020大会での活躍を応援していきます」と語りました。

講演会はブリスコーさんが英国パラリンピックチームのビジョン（目標）「スポーツを通して、障害のある人々にとって良い世界をインスパイア（啓発）する」、ミッション（使命）「パラリンピックの競技において、フィールド内でも外でも、英国が世界をリードする」、バリュー（価値観）「Excellence, Honesty and Trust（卓越、誠実、信頼）」を紹介することから始まりました。

そのうえで「英国パラリンピック委員会（BPA）は小さな団体ですが、『大きな野心』と『強い気持ち』を持って競技に挑み、これまで1,790個のメダルを積み重ねてきました。私たちはパラスポーツが障害のある人々の生活の質を向上させるという信念に基づき、世界有数の『パラリンピック強国・英国』を作り上げてきたのです」と力説。

「東京大会でも260名を超える選手たちが最高のパフォーマンスを発揮することを約束します」と、メダル獲得数（147個）で世界第2位となったリオ大会の結果を上回るような活躍を見せると力強く宣言しました。

ブリスコーさんは、1948年にイギリスのストーク・マンデビルから始まったパラリンピックの歴史を写真で紹介。また初めてパラリンピックがオリンピックと同年に開催されたのが1964年の東京大会であることを説明し、「東京は『オリンピック・パラリンピック』を2度開催する世界で最初の都市となります。世界中160カ国以上の国と地域から、4,400人を超えるアスリートが集まるスポーツの祭典が、（講演会開催日から）あと264日後に始まります」と東京大会の期待感を盛り上げました。

ポールソン博士は、パラリンピックで2度の金メダルを獲得した陸上競技のジョニー・ピーコック選手、世界大会で3度のメダリストとなっているアーチェリーのジェス・ストレットン選手、リオ大会の銀メダリスト・重量挙げのアリ・ジェワッド選手などを英国チームの注目選手として紹介。

「それぞれのアスリートが異なる障害を持ちながら練習に取り組んでおり、周囲からの支援を必要としています。川崎でトレーニングを行うすべてのアスリートは、市民のみなさんのホスピタリティーとサポートを楽しみにしています」とし、東京大会を目指す選手たちが、SNS上などでポジティブなコメントを発表していると笑顔で語りました。

また講演の最後にはブリスコーさんが、2012年のロンドン大会後に起こった社会的な変化について説明しました。

「ホスト国となったロンドン2012大会で、私たちは２つの素晴らしい経験を得ました。一つは多くの競技で良い成績を収めたこと、もう一つは競技に取り組むアスリートの姿勢を通じて、障害者に対する社会の見方を変えたということです。開催後の調査では、英国の８割を超える成人が『英国パラリンピックチームの活躍が、社会全体にポジティブなインパクトを与えた』と回答しています。パラリンピックは、障害のある人でも社会や子供達のヒーロー・ヒロインになれることを証明できる大会です。人々の障害者に対する意識を変えるには時間がかかりますが、私たちは“Yes, we can!” と唱え続けることが、社会の前進につながると信じています」と参加者に熱く語りかけ、東京2020大会のレガシーとして障害者を取り巻く環境や社会の意識に、より良い変化が起こることを期待すると述べていました。

〈講師紹介〉

ペニー・ブリスコーさん（写真右）

東京2020大会 英国パラリンピック代表チーム選手団長。アトランタ1996大会、シドニー－2000大会では英国カヌーチームのシニアナショナルコーチとして活躍。2002年から英国パラリンピック委員会のスポーツ局長を務めている。ソチ2014冬季大会からパラリンピクスGB（英国パラリンピック代表チーム）の選手団長に就任し、以降リオ2016大会、ピョンチャン2018冬季大会でも代表選手団を率いた。2017年にはスポーツ分野での功績が認められ、新年の褒章で OBE（大英帝国勲章）を受章した。

トム・ポールソン博士

リオ2016大会では、学術的な研究プロジェクトを監督し、2019年より英国パラリンピック委員会のパフォーマンス責任者に就任。東京2020大会における、あらゆるコアパフォーマンスサービスを担当している。

2019/06/28 ジュニア記者レポート

イギリス選手がやってきた！ ～「2018ジャパンパラ水泳競技大会」を取材しました

横浜市では、英国の事前キャンプ地「横浜国際プール」のある都筑区の「つづきジュニア編集局」の皆さんに、「英国を知る」ためのレポートを書いていただいています！

今回のレポートは、2018年10月に開催された「2018ジャパンパラ水泳競技大会」についてです。

それでは、ジュニア記者による取材レポートをお楽しみください。

ジュニア記者取材レポート：イギリス選手がやってきた！～「2018ジャパンパラ水泳競技大会」

2018ジャパンパラ水泳競技大会が北山田の横浜国際プールで行われ、ジュニア記者12名が応援に行きました。会場でもらったプログラムをみながら、どんな選手が出ているのかをチェック。イギリス選手がでるとみんなでイギリス国旗を掲げて「GO GB」と叫び応援、それ以外のときには「ニッポン、チャチャチャ」と楽しく応援し、盛り上がりました。イギリス選手にもきっと記者たちの応援が聞こえたと思います。

それぞれの記者たちの感想です。

僕は、イギリスの選手が出場するたびに新記録を達成していて驚きました。これからの2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて、もっとイギリスとの絆を深めていきたいと思いました。

久保 心之介

ジャパンパラ競技大会は、手の不自由な方や足の不自由な方が活躍していました。選手みんなが頑張っている大会でした。最下位でも一生懸命泳いでいる姿や、障がいがあったとしても頑張る姿を見て、すごいなと思いました。

これからも選手に頑張ってほしいです。

山田 咲幸

今回のジャパンパラ水泳競技大会で、一番心にのこったことは、片手だけで泳いでいた選手のことです。片手だけにも関わらず100メートルをみごとに泳ぎきり、スピードも私と同じくらいでおどろきました。この大会を見ることができよかったと思いました。

四方 あかり

私は、今回初めて、障害者の方が参加されているスポーツを見に行きました。なかなか「生」では見れない貴重な体験だと思ったので、始まる前からワクワクしていました。

出場国は、「アメリカ」「カナダ」「メキシコ」「コロンビア」「イギリス」「スペイン」「オーストラリア」「ニュージーランド」「日本」の9か国で、どの国のどの選手も泳ぐのがとても速くて、びっくりしました。さらに、今日の大会で大会新記録や日本新記録という素晴らしい記録を出された方も多くいらっしゃって、「わぁ、すごいなぁ！」と感激しました。選手達は泳ぎが速いだけでなく、泳ぎのフォームもきれいで、自分も見習いたいなと思いました。

私が特に、注目した団体は、イギリスです。（もちろん日本チームも応援しています！）イギリスチームは、日本の環境になれるためのオリンピック事前キャンプをしますが、その場所として都筑区が選ばれました。

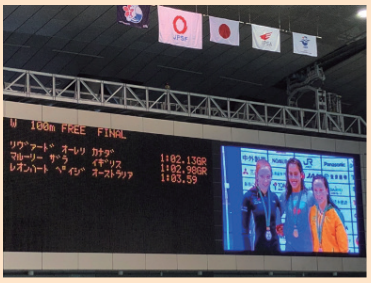
日本の皆さんが、日本チーム同様に温かい目でイギリスチームに声援「GO GB（GREAT BRITAIN＝英国の略）」と送ってあげたらイギリスの方たちも、もっと日本が大好きになると思うので、みんなで応援したいと思います。

田中 希和

午後に行われた決勝の試合を見に行きました。まず最初に驚いたのが、客席にかなりの人がいたことです。片側は企業の方々がいて、もう片側には一般の方が入っていましたが、年配の方から小さな子どもまでさまざまな方が見に来ていました。

この写真は、女子100メートル自由形のS6の表彰式の写真です。サマー・ニュートン　メイジーさんが表彰台にのぼりました。小柄であるにもかかわらずパワフルな泳ぎで思わず応援してしまうような泳ぎでした。

次は同じ種目のS10の表彰式です。マルーリー　ザラさんは私の1つ歳が上で、まだ高校生なのに大会に出ていると知りとても驚きました。男子の50メートルバタフライでは小学生や中学生も出場しており、また30-40代の方も出場していて、年齢層の厚さを感じました。



これは男子100メートル自由形のS12の表彰式です。クレッグ・ステファンさんが大会新記録で優勝を飾っていました。視覚障害でありながらも一般の大会さながらの泳ぎで圧倒されました。同じ種目の1組目では、背泳ぎで出ている選手もいて、自由形=クロールという概念にとらわれず、自由に泳いでるのをみて、こういった考え方もあるのだなと感じました。

日本での開催ということで観客はほとんどが日本人でした。しかし、日本人、外国人、と区別せずに皆が応援していて、一体となって応援できるのはパラスポーツの良いところなのではないかと思いました。

また、今回の結果を見ると、外国人の方も多く優勝していましたが、日本人の選手もかなり表彰台にのぼっているなと感じました。パラリンピックに向けて、日本人がメダルを狙える競技なのではないかと思いました。世界にはもっと早い選手がいて、世界の壁は厚いけれど、2020年に向けて、日本人の選手、さらにはさまざまな国の選手にも目を向けて応援をしていきたいです。

中島 万賀

取材:久保 心之介、桑野 煌己、高橋 那菜子、山田 咲幸、山田 真白、四方 あかり、松岡 莉香、森 結里、長谷川 絢美、田中 希和、中島 万賀

〈つづきジュニア編集局って？〉

つづきジュニア編集局は、横浜開港150周年・都筑区制15周年の節目にあたる2009年に都筑区の記念事業として始まりました。今では、都筑区だけでなく横浜市全体に目を向け、小学５年生から高校生のジュニア記者が、子どもの目線と力をフルにいかして、取材に行き、記事を書いています。

2019/10/01 ジュニア記者レポート

英国代表チームが横浜国際プールにやってきた！ GO GB!! がんばれ、英国！

横浜市では、英国の事前キャンプ地「横浜国際プール」のある都筑区の「つづきジュニア編集局」の皆さんに、「英国を知る」ためのレポートを書いていただいています！

今回のレポートは、2019年7月に実施された英国水泳代表チームのプレ事前キャンプについてです。それでは、ジュニア記者による取材レポートをお楽しみください。

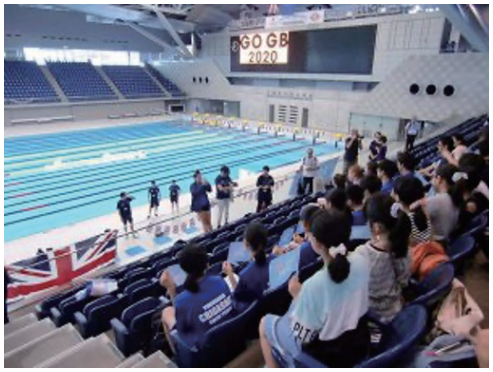
2019年7月12日～28日に韓国光州で開催された世界水泳2019に出場する英国選手が横浜国際プールで練習するところ、そして最終日に地元の人たちと交流する送迎レセプションを、取材させていただきました。

7月13日 英国プレ事前キャンプ：練習のようす

私たちジュニア記者は、プールサイドで練習を見させていただきました。他にも中学校の水泳部など、地元の若者たちが集まって熱心に見学していました。

施設の方のお話によると、プールの温度が27度と低めにしたり、水も深くしたりして、競技用に合わせてプールのコンディションを調整します。今回、選手は、毎日午前中と午後2時間、9日間続けての練習をします。

観客席から、練習のようすをずっと見せてもらいました。選手たちは 立て続けに1500Mを泳いだり、片手を上げたままクロールを泳いだり、また4人で息を揃えてバタ足をしたりするなどの練習をしていました。基本的にはゆっくりとしたペースで泳いでいましたが、タイムを計る時には、一転してその倍くらいのペースで泳いでいるように見えました。ゆっくり泳いでいるときには、見ている私たちに手を振ってくれたりして、とてもうれしかったです。



練習のあと、インタビューに答えてくれました。記者たちは、がんばって調べてきた英語で質問しました。答えは通訳の方に教えてもらいましたが、選手に「英語上手だね」とほめられました。

選手にインタビュー！

Q.国際プールのプールはどうですか？
A.とても優秀な施設のスタッフがいてくれて、コンディションをよくしてくれるので、とても泳ぎやすく、すばらしいです。

Q.一日どのくらい泳ぐのですか？
A.練習のときには、だいたい1日12㎞～14㎞を泳ぎます。

Q.水泳をはじめたきっかけは何ですか？
A. 12歳の時、憧れの水泳選手がいたことから、水泳をはじめたいと思いました。

Q.水泳のどういうところが面白いですか？
A.水泳をするようになって、大会などで外国にいくことが多くなりました。外国旅行がたくさんできる楽しみもあります。

Q.スランプなどのとき、どのように気持ちを切り替えますか？
A.上手く泳げなかったとき、どうして出来なかったかを考えて、一からやり直しています。

Q.選手の皆さんは泳ぐ前にどんなものを食べていますか？
A. 選手のみんなはそれぞれ食べるものが違います。私はプロテインと野菜をよく食べます。

取材：菊池 直希、古林 沙羅、森 結里、清水 一葉、清水 麻緒、石嶋 愛華、足立 理子、長谷川 絢美、田中 希和、鈴木 翔大

7月16日 歓送レセプション

レセプションでは、始めに国際プールで練習しているコーラスグループが、「ビリーブ」という曲を歌って選手たちをむかえました。選手たちが、「練習したことを発揮して成果を出せることを信じている」という理由でこの曲を選んだそうです。

選手たちが全員イスにすわると、北山田小学校が選手ひとり一人に宛てて書いた、メッセージカードを手渡し、プレゼントしました。それは、四季の森小学校のみなさんが、横浜の花を押し花にしてカードにしたものに、北山田小学校のみなさんがメッセージを書いたものです。

次に、東山田小学校から「世界の約束」という曲をリコーダーで演奏しました。スポーツを通して世界の平和を、という願いを込めてこの曲を選んだそうです。最後に英国選手たちからお礼の言葉と、額縁にはいったメッセージボードをいただき、全員で集合写真を撮りました。

選手たちが、退場するときに、こどもたちみんなで花道のトンネルを作りました。選手達は、みんなにタッチしてくれました！水泳選手の人たちは、みんな手が大きく、私たちの顔の一つ分はありました。背も高くて、すごいなーと思いました。

取材：月岡 結菜、古林 沙羅、草郷 緑彩、長谷川 絢美、田中 こころ、野口 明日美、廣田 心乃

ジュニア記者の感想

すごい距離を泳いでいるのに、疲れを見せない姿は本当にすごいと思いました。これがアスリートといわれる人たちなんだと感動しました。ミニレセプションでは、小学生から手作りのプレゼントをもらうとうれしそうにしていました。世界水泳では練習の成果を発揮して頑張ってほしいです。

長谷川 絢美（小学6年）

レセプションでは、選手の入場を、歌で出迎えました。選手はみんな、背が高くて、用意したパイプイスが小さく見えました。身長が高いとゴールするのも速くタッチできるのかなと思いました。英国選手も日本の選手と同じように応援したいです。2020年に向けて練習をがんばってほしいです。

月岡 結菜（小学5年）

選手たちが、レセプションのギリギリまで練習して疲れていると思うのに、子どもの作ったトンネルをくぐる時、優しい笑顔をみせてくれたのが、印象的でした。ぜひ、世界水泳でも、頑張って欲しいです。

野口 明日美（小学5年）

英国選手のチームワークがよかったです。一番チームワークが良いと思ったのは、飛び込みです。もし飛ぶ人がミスをしてしまったら練習のサポートをしている人が怪我する、そんな構図でした。それを見て私は「相手を信頼しているな」と思いました。私も練習することがあったら、協力していくことが大切だと改めて感じました。

足立 あやこ（小学6年）

レセプションの終わりに、英国選手達が通りがかったので、思い切って「GO GB！」と後ろから叫びました。そしたら選手達が、「Oh,Thank You！」と言ってくれたので、うれしかったです。

草郷 緑彩（小学6年）

英国選手と交流出来る場に参加できたことは本当に良い経験だったと思います。言葉を超えて会話するという楽しさや英国に対しての興味を持てたので、今後は、世界水泳や東京2020大会などを通して、もっと英国について知る機会を作りたいです。

田中 希和（小学6年）

今回、英国チームの取材に行ってとても感激しました。練習を見学していると、とても長い時間泳いでいるのに、自分たちに手を振ってくれたり、質問にやさしく答えてくれたり。また、小さな子には選手のカードを配ってくれて、ハイタッチをしてくれました。このように優しくしてくれる英国チームの練習を「GO GB!」の旗を振って応援できたのがとても嬉しかったです。来年の東京オリンピック・パラリンピックでは、英国チームも応援して、チームに貢献できるようにしたいと思いました。

菊池 直希（小学6年）

つづきジュニア編集局の紹介は24ページを参照

2021/03/24 ジュニア記者レポート

すべての人をつつみこめる社会へ ～英国パラリンピアンからのメッセージ 「共生社会について考える」オンラインセミナーを視聴して

2019年3月19日、ブリティッシュ・カウンシル協力のもと、英国のパラリンピアン、スージー・ロジャースさんに生出演いただき、共生社会について考えるオンラインセミナーが実現しました。セミナーにご参加いただいたジュニア記者さんに、今回のセミナーについてレポートをしていただきましたので、ぜひご覧ください。

英国のパラリンピック金メダリストのスージー・ロジャースさんの「共生社会について考える」をテーマにしたオンラインセミナーに参加しました。1時間ほどの短い間でしたが、幅広い分野のお話を聞くことができ、貴重な体験でした。

スージー・ロジャースさんは、バタフライと自由型を得意とする水泳選手でした。ロンドン五輪では3部門で銅メダルを獲得し、次のリオ五輪では金メダルを獲得し、銅メダルも2つ獲得するという華々しい功績をもつ人です。引退されてからは、「インクルージョン」についてグローバルに講演を行い、ブリティッシュ・カウンシルの障がい者諮問委員会のメンバーとしてや、障がいのある人をサポートする活動を行なっているそう。水泳選手として海洋生物や地球の生態系を守る活動も行なっているとのことでした。

「インクルージョン」とは、障がいのあるすべての人が教育、雇用、余暇、社会などあらゆる分野に参加することを確保し、そのために必要なサポートや体制を提供するという理念で、障がいのあるひと、ないひとも共生し、つつみ込んでいくという考え方です。ロジャーズさんは、セミナーの中でこれをよく口に出していました。障がいのある人だけを特別扱いするのではなく、怪我をしている人や体調の悪い人、高齢の方や小さいこども、妊婦さんも、そして私たちのためにもできるだけバリアを減らしていくべきだと思いました。
また、物や施設のバリアフリーだけでなく、心のバリアフリーも大切だと言っていました。心のバリアフリーを進めていくためには、多くの障がい者の人を知る機会が大切です。すると、パラリンピックで見ることができる、かっこいい選手たちは、私たちが障がい者のことを知る最初のきっかけになりうるのではないでしょうか。いろんな人が集まって協力するパラリンピックを理想の形（ロールモデル）とし、日常生活に役立てて欲しいと、ロジャーズさんはメッセージをくれました。

私は2020東京パラリンピックのボランティア資格が残念ながらありませんが、機会があったらパラリンピックのボランティアに参加したいと強く思いました。

橋本 みなみ

ジュニア記者から質問することができました。
Q.パラリンピック選手になったきっかけはなんですか？
A.私はパラリンピックの大会をよく見ていました。見る中で、すばらしいチャンスがあるのだということを感じていました。そして、ロンドンで開かれることになって、自分の国でやるなら、大会に出たいと思いました。そのために大会にでるために、とにかく一生懸命練習しました。
Q.金メダルを取るために工夫した事はなんですか？
また、金メダルを取るために苦労した事を教えてください。
A.怪我や病気が多く、それを克服していくことがたいへんでした。トレーニングをはげしくすると順調に練習していたと思ったら、急に病気になったりして、一貫して練習できないということは苦しかったです。大会と大会の間の4年間に実績を残すためにできることはすべてやったと言えると思います。そんな中、心の支えだったのは家族です。家族はどんなときも応援してくれました。自分ひとりではない、チームで戦っているという気持ちがいつもありました。そして、コーチやスタッフのサポートがあったからこそです。

広瀬 文香

今まで僕は、障がいのある方に出会ったとき、どう対応すればいいかをむずかしく考えすぎていたと気がつきました。どうやって対応すればいいかを考え過ぎていたために、距離を置いてしまっていた。

今回、スージー・ロジャースさんが話していたことでいちばん印象に残った言葉があります。「障がい者の障がいに目を向けるのではなく、その人自身に目を向けて接してほしい」という言葉です。このことを聞いて、これからはもっと障がいのある者の方々に、気軽に接していこうと思いました。差別や偏見のない社会になっていけるように、僕もできることを努力したいと思いました。

長谷川 路彰

2021/08/02 ジュニア記者レポート

ジュニア記者による2021年英国事前キャンプに関するインタビュー

横浜市では、英国の事前キャンプ地「横浜国際プール」のある都筑区で活動する「つづきジュニア編集局」の皆さんに、「英国を知る」ためのレポートを書いていただいています！

今回は、ジュニア記者の皆さんが、キャンプディレクターであるティム・ジョーンズさんと、英国の事前キャンプ地となっている国際プールの吉田館長にお話を伺いました。それでは、ジュニア記者による取材レポートをお楽しみください。

国際プールで見つけたオリンピック精神

「GO GB」は、オリンピック・パラリンピックにおいて、英国の事前キャンプ地である横浜市、川崎市、慶應義塾大学が掲げた合言葉です。「GO」は「頑張れ」、「GB」はイギリス本土がある島の名前「グレートブリテン」を意味しており、イギリス選手団を応援するメッセージとなっています。

今日、私たちは都筑区にある横浜国際プールに赴きました。先程も述べましたが、横浜市は英国のホストタウンを担っていて、横浜国際プールはオリンピックの競泳、飛込の事前キャンプ地となっています。

取材の前半は事前キャンプのディレクターとして来日していたティムさんに、リモートでお話を伺いました。ティムさんの主な仕事は ①若い人材を発掘し、②選手他たちにベストなスケジュールを立てることだと言います。選手を含め、英国チームは慶應義塾大学の日吉キャンパスに宿泊しているそうです。ここで一人の記者が選手の食事の内容について質問をしたのですが、これに対しティムさんは、日本食とイギリスの食事をミックスしていると答えたので、私は驚きました。少しでも慣れた食事を摂った方が選手のパフォーマンスに良い影響を与えるのではないかと思っていたからです。しかし、お話を聞いて、オリンピックの意義として「スポーツを通した人間育成」のほかに「世界平和」があることを思い出しました。もちろん本番で良い結果を出すということも必要ですが、それと同じくらい多文化を理解することも平和への一歩として大事だと気づかされました。ちなみにティムさんの好きな日本食はギョーザでした。

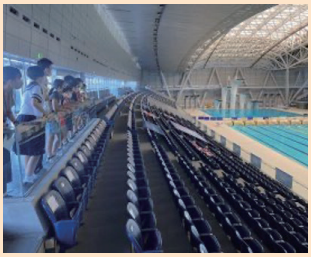
後半は横浜国際プールの館長である吉田さんのお話を聞きました。想像よりも明るく親しみやすい方でした。キャンプ地としての準備は約5年前から始まっていて、横浜市や都筑区の職員や、旅行会社の方と協力してサポートしています。ただでさえ選手たちの要望に合った環境づくりが求められるのですが、今年はCOVID-19対策のため、さらに多くの配慮が必要となったそうで、大変だと感じました。しかし、そのような私の感想とは裏腹に、横浜国際プールがキャンプ地に選ばれたことについて吉田館長は『非常に光栄です！「国際プールはメダルが取れるプール」となれば良いですね』と笑顔で答えていました。このような状況での開催だからこそ、その中心にいる人たちには吉田館長のようなポジティブさが大切だと感じました。

山本 承太郎

横浜国際プール取材しました！

横浜国際プールは英国代表チームの事前キャンプ地になっています。私たちは、オリンピック期間中の7月28日、横浜国際プールの館長の吉田文雄さんと英国代表競泳のコーチをしているティムコーチにお話を伺いました。

横浜国際プールは、国内最大級のプールです。プールは床の高さを調節することができます。一番深いと3.5メートルの深さにすることができます。



約4,000席の観客席があり、長さ５０メートルのメインプールは、冬は床が設置され、体育館として使われます。変更をするときは、ひび割れがないかなど、念入りなチェックをしているそうです。メインプールのほかに、５メートルの飛び込みダイビングプールとサブプールがあり、サブプールは50メートルのプールを25メートル2つ分に分けることができます。

横浜国際プールでは、コロナ対策に気を使っています。体調管理、検温、消毒、換気、三密対策をしています。館長の吉田さんは、国際プールで練習している英国選手がメダルをとると、自分のことのようにうれしくなる、と話してくれました。

ティムコーチは、かつて選手をしていて、選手時代には、一日に6時間、6キロほど泳いでいたそうです。水泳を通して世界中を旅しているそうです。今回コロナの影響で、英国から日本に来るのが大変だったそうです。日本の食べ物で好きなものは餃子だそうです。

今回取材をして、プールの床が変わることを知らなかったので、驚きました。

英国選手のお話は聞けませんでしたが、ディレクターのお話を聞いて、選手の日頃の練習量はすごいと思いました。オリンピックで英国選手が活躍したら嬉しいです。

折下 陽琉

「支える」は温かくする

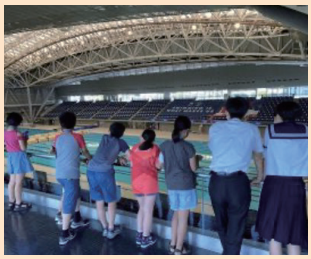
今回は、2人の心強いオリンピック競技のサポーターの方々に取材しました。1人目の方は、私たちのまち(横浜)に事前キャンプで訪れた英国選手のキャンプディレクターであるティム・ジョーンズさんです。

英国事前キャンプディレクターとは、大物選手のたまごのような若い選手を発掘することをする方です。キャンプディレクターの役割はそれだけではありません。選手の皆さんが競技でベストを出せるようにサポートすることが1番大事な役割です。ティム・ジョーンズさんは、元英国代表の水泳選手であり、元オリンピックのコーチをやっていらっしゃいました。ティム・ジョーンズさんは、選手とコーチ両方の経験者だからこそ選手のベストを引き出せるのだなと思いました。

イギリス代表の水泳選手の皆さんは、1日に多くて6時間もの練習をしているそうです。そのため、ティム・ジョーンズさん含め選手をサポートする皆さんは、選手がベストを出せるようにするためいろいろな工夫をしていました。食事のメニューを考えたり、日本人サポーターの人と選手の皆さんの居場所を完全に分けて、オンラインでのやりとりを行うことでコロナの感染者を抑えたり。とても大変だなと思いました。

最後にティム・ジョーンズさんは、「自分が強いと信じてレースに集中するのが大切だ」と教えてくださいました。私は、人生のレースも前向きに進んでいくのが大事なのかなと考えました。

2人目の方は、英国事前キャンプ施設の一つである横浜国際プールの館長の吉田さんです。



吉田さんも、ティム・ジョーンズさんと同じ英国代表選手のサポーターです。国際プールを通して選手のみなさんにとっての最高なコンディションを提供していたのです。

例えば、国際プールでは5年前から準備・打ち合わせを、また2年前には事前キャンプの練習も行ったそうです。コロナ対策の面でもサーキュレーターなどの最新技術を用いて安心安全の環境が整えられていました。そのため、英国選手からも国際プールは事前キャンプ施設として好評でした。吉田さん自身も、英国選手の事前キャンプについて「とても光栄です」。と話していました。

そして、この横浜国際プールの施設には秘密がいっぱいありました。国際プールには3つのプールがあります。最大3.5メートルまでに中の水を入れたまま深さが変えられるメインプール・プール内の壁が動き25メートルプール2つにも50メートルプール1つにもなるサブプール・深さ5メートルもあるダイビングプール。どれも使う用途に合わせて細かく設備の設定を変えられるのです。また、5月から9月の間はプールとして使い、10月から4月の間は、プールの底を平らになるまで上に引き上げ、床を取り付け体育館として使う。夏は水泳・シンクロ・とびこみの教室、冬は、サッカー・ダンス・テニスの教室なども行われています。つまり、一年中多くの人に利用されているということです。

最後に吉田さんは、私たちに特別なニュースを教えてくれました。オリンピック終了後には、国際プールのロビーに英国選手のサインボードと今回の事前キャンプでの選手の様子を提示するそうです。是非また行きたいと思いました。

東京2020オリンピック・パラリンピック。新型コロナウイルスにより大会が延期になったり、無観客で行ったりと今までにない新しいかたちでの開催となりました。パラリンピックはこれから開催されます。

また世の中では、開催に対する反対の声や政府の問題点などたくさんのことがネット上でもあげられました。たくさんのトラブルに見舞われましたが、私は今回2人の方にお話を伺ったことで「支える」ことは人の心を、そして世の中を温かくするのだなということを感じました。

山本 未來

つづきジュニア編集局の紹介は24ページを参照